

社会的影響力を持つ公共都市空間としての鉄道駅

【2023年度 KR-102】

立命館大学 産業社会学部 現代社会専攻 准教授
富永 京子

1. 調査研究の背景

交通の拠点としてのみならず、人々が集合する都市空間として「駅」がある。人々が社会に対して影響を及ぼそうとするとき「駅」のもつ象徴性や、人が集まる場としての性格が着目されることは歴史的にも数多くあった。駅は広報手段を持たない人々が街頭での宣伝や権利を主張する場でもあった（東日本鉄道文化財団、『鉄道と美術の150年』左右社）。

筆者は、日本で「鉄道」や「駅」が多くの人々に親しまれ、自由や安全を希求するスペースとして用いられる点を、過年度の研究で明らかにした（研友社『Annual Review No.25』参照）。ここから本研究では、公共都市空間としての可能性を模索するため、都市空間研究の観点から「駅」の検討を行う。

2. 調査研究の概要

本研究は「都市空間研究」の枠組みを用いて研究を行う。この枠組みは、若者や障害者、外国人といった少数者の人々による都市空間の活用という点からマイノリティと都市の関係性を論じる研究分野であるが、鉄道駅の研究にも十分適用可能であると考えられる。

申請者はこれまでの研究（Tominaga 2023）で、駅を拠点に女性が性暴力や生理の貧困への啓発活動を行った過程を検討したが、彼女たちがどのような社会的意図から「駅」という空間を選んだのかを明らかにする。本研究では鉄道駅での公共的活動に従事した15名程度に聞き取り調査をする。貴会から助成を頂いた際、研究費は調査旅費、調査協力者謝金、インタビュー文字起こし経費として執行する。本調査研究により、先行研究が明らかにしてこ

かった都市空間としての鉄道駅の可能性を提示する。

先行研究（Carroll, Calder-Dawe, Witten, and Asi-asiga 2019）によると、公共空間は、都市に十分にアクセスする権利のない人々が目的外の利用を可能にする場でもある。「アクセスする権利」とは、具体的に書くと、以下のようなものとなる。

①都市空間の利用においてはマイノリティが少数派である。都市の路上は、特に健常者、成年、有職者といったマジョリティのための空間となっており、例えば子どもの場合、遊びのための空間が公園や運動場に集中する。他のマイノリティに関しても、「マイノリティのための場所（例えばジェンダーレストイレなど）」以外では、彼らが安心して滞在できる場所が限られてしまう。さらにそのような場所でも、用途が制限されるため完全にマイノリティが自由になれるとは言い難い。

②都市では、マイノリティが遊び、探索し、ぶらぶらすることを歓迎する安全な場所が非常に少ない。脆弱性の強い、例えば子どもや障害者といった存在はますます監視され、指導され、コントロールされており、公共空間で活動する自由が設計、法令、安全の面からの関心により制限される。

このような「不自由」を、マイノリティの人々はクリエイティブな空間利用によって打破しようとしている。これを「目的外利用」と呼び、この目的外利用が都市空間への問題提起になると先行研究は指摘している。ここでいう「目的外利用」をされる空間は、例えばコンビニエンスストアの前やマンションの非常階段といった場が挙げられるが、この理論に沿えば「駅」はたんなる交通機関ではなく、人びとがなんらかの「目的外利用」をする可能性もあり、その一環として、マイノリティである女性たちが「駅」を起点に活動を行うというものがある。

自らの過ごしたいように用途を持って空間そのものや、空間を規制・構築する制度を変革するタイプの活動は Prefiguration（予示的制度）という概念をもって分析できる。先行研究の議論では公園や広場での試みを検討することが多かった（Reinecke 2018; Carroll et al. 2019）が、日本では「広場」にあたる公共空間が少なく、おそらくは「駅」がその代替になる可能性を考えた。その点で、本研究は「鉄道」や「駅」をも公共空間の一部として捉え、危険性の低減を希求した点で独自性を持つ。

当初の研究計画としては、フリーナプキンプロジェクト（「駅長の許可を得て、駅のトイレに生理用ナプキンを置いておくプロジェクト。その後男女共同参画協議会や自治体議員との連携につながっている」）や「痴漢撲滅キャンペーン（後に東京メトロ等による入学試験日の警告アナウンス、内閣府の啓発キャンペーンへと繋がる）」といった活動を調査する予定であったが、もう少し多様な「駅」という場の用法があるのではないかと考え、マイノリティと「駅」の捉え方を、いわゆる社会運動・政治運動を中心に、しかしそれに限らないものに拡大し、インフォーマントを募って研究をした。その結果、以下が明らかになった。

(1) 2019年より、全国の都道府県で、女性たちが性暴力について語るイベント「フラワーデモ」が全国で見られるようになった。参加者は公共空間にたたずみながら自らの受けた性暴力や性被害の経験を話す。大規模な場合はスピーチで行うこともあれば、雑談に近い形式のものもある。また、集団で黙って立つサイレント・スタンディング方式のものもある。そこで、人が集まる場所として多くの都市で選ばれるのが「駅前」であった。「駅前」のような場は他者の攻撃を招きやすく、あるいは人が集まる故に、住民の数が少なく、顔見知りが多い地域コミュニティではリスクが高いとみなされると筆者は仮説づけた。しかし、筆者が聞き取りを行った人々はそのような場として「駅」を捉えるにとどまらず、むしろ、他の社会運動が行われるような「公園」や「国会前」と比べ人数も多く、かつ流動性が高く、悪意を持って立ち止まる人が少ないという意味で、「多くの人に存在を示しながら」「自分たちのプライバシーや安心が守られる場所」として捉えていた。

また、駅がその集まる人数ゆえに攻撃を招くものの、一方で議論や討論を可能にする場であるという

意見もあった。これがたとえば商業施設であれば警備員や店員からの静止を招く可能性もあるだろうし、「デモ行進」のような形態を強いる路上であれば、妨害者がいたとしても議論にはならずそのまま収束してしまうだろう。異質な人たちが交わり、他者が話していてもおかしくない場所だからこそ、「反論」や「討論」が可能になる。

こうした聞き取りから示される「駅」の特性は興味深い。多くの人々の耳目に触れなければ「意思表示」としては成立しないわけだが、かといって多くの人の耳目に触れすぎ、予期せぬ人々に情報が入りすぎると上述のように攻撃されることもあれば、プライバシーが侵害されてしまい、安心が脅かされてしまうこともある。つまり、「群衆」はいないといけないが、過度に他者に関心を持つような人々であってはいけなし、そうした人々が攻撃して来た場合の反論ができる場でなくてはならない。「駅」というのは、それらを可能にする数少ない場だと考えられる。

(2) もう一点、興味深いプロジェクトがある。それは「排除ベンチで無理やり座る間抜けなレジスタンス運動」(X: <https://x.com/uzumakidou/status/1718175635913531884?s=20> 2023年3月30日最終アクセス) から派生した、「駅で休めるところを探す運動」である。この前身となる「排除ベンチで無理やり座る」プロジェクトそのものは、2020年にホームレスの60代女性が頭を殴られて死亡した事件に端を発する。その被害女性がホームレスとなった際に街に休める場所がないこと、休むことを妨害する設備として、真ん中に仕切りの入ったベンチやスツール風腰掛けといった「排除アート」が存在することから、貧困や社会運動に関心のある人を中心に、「排除アート」や「排除ベンチ」のあるところで無理やり座る、休むといったプロジェクトが行われるようになった。とりわけ「駅」が選ばれるのは、殺害されたホームレス女性が休んでいた場が「バス停」であったためだろう。五十嵐太郎は、『誰のための排除アート?』において「雨露をしのぐことができる」「街灯が存在し、女性にとって安全な場所」、かつ、「乗降客が多すぎず、あまり迷惑をかけない場所」として、ホームレス女性がバス停を使っていたのではないかと推察している(五十嵐2022)。駅を拠点に「排除ベンチで無理やり座る」「排除アートで無理やり休む」を行っていく中で、例え

ば昔からある銅像などの「アート」の多様性について気付いた、という人々の意見も見られた。

しかし、駅における「アート」は、排除を目的としたパブリック・アートだけではない。例えば数多く存在する銅像や壁画なども「アート」であるが、こうした側面が見過ごされやすい。このような「都市機能の複数性」「都市の歴史性」の集積地として「駅」という空間が存在するものの、生活者はその一面しか認知できていないことを、この「排除アート」での行動を経験して気付いた歴史的パブリック・アートの存在は教えてくれる。

ここで興味深いのは、社会的排除という問題から「排除アート」を経由して駅という空間について思考することに行き着いた人々が、パブリック・アートに着目することで、銅像の存在を通じながら「駅」という施設の歴史性、伝統性をもまた認知することになったという経緯である。こうした銅像には人物の功績などを通じて都市の歴史を刻んだものも少なくない。このような試みを通じて浮かび上がったのは、まさに「集合的記憶」(清水 2022)としてのパブリック・アートの集積地としての「駅」ということもできるだろう。交通の拠点であるとともに、アートの集積地でもあり、多様な人の合流地でもあり、雑踏であり、問題提起の場でもある「駅」に関して、

人々が単一の機能の認識に集中してしまうことがよくわかる事例である。

本研究の中で特に興味深かった試みとして二点の知見をあげたが、以下の知見をまとめると、下図のような形となる。欧州と比較した場合の独自点として「都市空間の曖昧さ・雑多さ」がまず挙げられるだろう。日本においては、今回で研究したパブリック・アートの議論をはじめとして、都市計画に関する計画性の不在がよく論じられている。そのために都市がさまざまな機能を有したり複層性をもっているわけだが、じつは生活者は、その一点——交通の拠点としての側面や問題提起の場としての側面——しか認知できていないことが、しばしばある。この点は、都市計画研究などでは見えづらい、人とその営為に検討の重心を置いた Prefiguration 研究ならではの観点であるだろう。

3. 考察と今後の議論

本研究では、「駅」が多様な機能を持つ公共空間であるにもかかわらず、それが利用者に認知されていない実態、また、デモやパブリックスピーチを行うことや、パブリック・アートの見学という「目的外利用」によってその複数の性格が人々にも認知さ

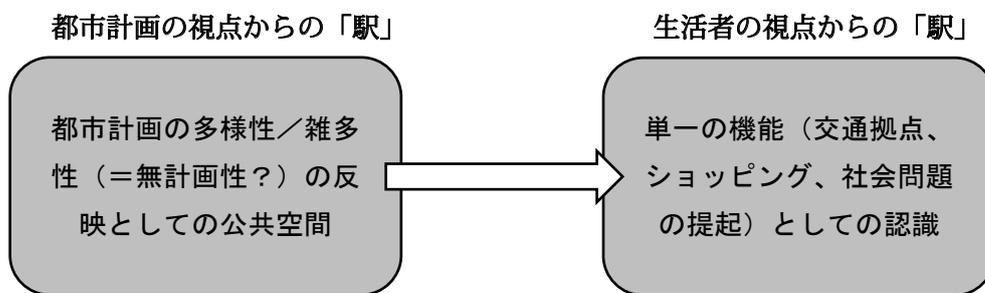


図1 本研究と先行研究の相違点

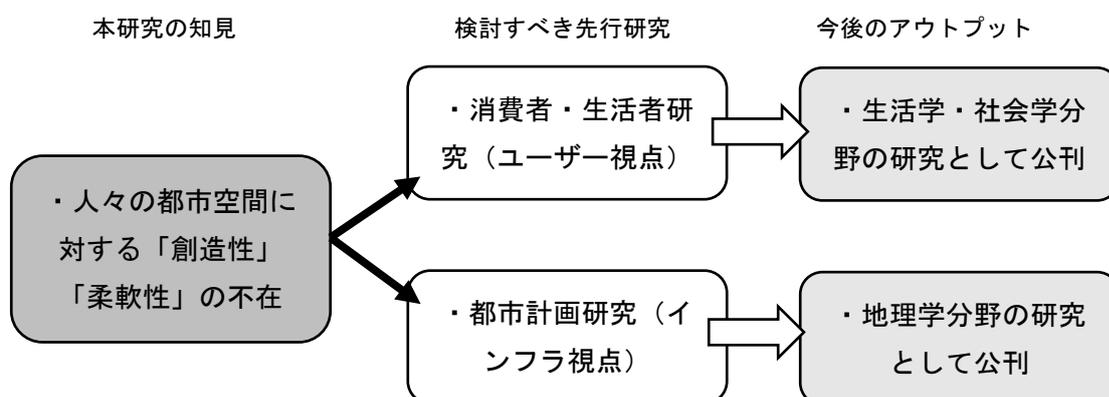


図2 今後の研究の方策

れることが明らかになった。「駅」は単なる交通の拠点ではなく、多様な（多くは他者に無関心の）人々が共在する場であること、またアートや建築物といった歴史性・社会性を帯びた建造物がある複層的な空間である存在だが、その豊かさは日本社会を生きる人々には相対的に希薄に感じられているということだろう。

今後の研究としては、こうした公共空間に対する人々の認識の希薄さ、さらにいうならば「柔軟性の不在」が、どこから生じているのかを明らかにしたい。□

謝辞

本調査研究を行うに当たり一般財団法人研友社、住友電工グループ、トヨタ財団、全労済協会の支援を得た。

参考文献・引用文献

1) P. Carroll, O. Calder-Dawe, K. Witten, and L. Asisiga: A Prefigurative Politics of Play in Public

Places: Children Claim Their Democratic Right to the City Through Play, Space and Culture, 22(3), pp.294-307, 2019

- 2) J. Reinecke: Social Movements and Prefigurative Organizing: Confronting Entrenched Inequalities in Occupy London, Organization Studies, 39(9), pp.1299-1321, 2018
- 3) K. Tominaga: Social Reproduction and the Limitations of Protest Camps: Openness and Exclusion of Social Movements in Japan, Social Movement Studies, 16, pp.269-282, 2017
- 4) K. Tominaga: Protest tourism as gendered experiences, Frontiers in Sustainable Tourism, 2, 2023
- 5) フラワーデモ：フラワーデモを記録する，エトセトラボックス，2020
- 6) 五十嵐太郎：誰のための排除アート？，岩波ブックレット，2022
- 7) 清水亮：「予科練」戦友会の社会学：戦争の記憶のかたち，新曜社，2022